

# 台湾と山口との新しい関係 – MOUの締結

## The Conclusion of a Memorandum of Understanding with Chung Cheng University, Taiwan

井竿 富雄  
IZAO Tomio

### Abstract

This report is about the conclusion of a Memorandum of Understanding between the Faculty of Intercultural Studies at Yamaguchi Prefectural University and the Faculty of Humanities at Chung Cheng University, Chia-Yi, Taiwan. This MOU is the first step in establishing a relationship between Yamaguchi Prefectural University and Taiwan.

### はじめに

この文章は、山口県立大学国際文化学部と台湾・嘉義県民雄郷にある国立中正大學文學院との間にMOU (Memorandum of Understanding) が締結されたことについて、これまでの経緯や今後について若干の考察を交えた報告である。山口県立大学国際文化学部において、国際文化学科は、「地域実習」、文化創造学科は「地域文化実習」という科目を有している。それぞれ国内と国外の両方の実習があるが、予算等の都合上、国外実習は現在非常に減少せざるを得なくなってきた。

特に国際文化学科の海外地域実習において残ったのが、ここで取り扱われる「台湾と山口との関係を学ぶ」という趣旨のものである。この実習が今回のMOU締結に至る大きな要素であった。

海外の大学と交流協定、その中でも最も簡易な形態であるMOUを締結することは、ほとんどの大学において行われていて、それほど重大なことではないとされる。しかし、山口県立大学のような小規模の学校においては、国際交流のための人的・物的資源に限られることから、どうしても関係進展のための動きが慎重にならざるを得なかった<sup>(1)</sup>。ここまでの背景や今後のことについて、以下の通り報告したい。

### 一 台湾と山口との関係

まず初めに、山口と台湾との歴史的な関係について記しておかなければならない。

山口と台湾との歴史的関係については、近年では栖來ひかり氏の著書<sup>(2)</sup>で知られるようになったので、案外関心を持っている人は多いのではないかと考えられる。日本が台湾を植民地統治していた時代(1895-1945)、多くの山口県出身者が台湾へ渡った。特に初期の台湾統治にあつては、山口県出身者が実際に台湾総督に任じられている(乃木希典、桂太郎、児玉源太郎、佐久間左馬太)。後述する海外での日本語教育も、スタートは台湾植民地統治であった。現在の台北市士林にある芝山巖で殺害された日本近代史初めての在外

図1 中正大學文學院の建物



日本語教員のうち二人は山口出身だった。この事件の慰霊碑は今も現地に残るが、碑文を書いたのは伊藤博文である。この事実はよく確認しておかなければならない。台湾の近代史は、台湾が日清戦争とその後の下関条約によって清から切り離され、日本の植民地統治下に入ったことに色濃く影響されている。この事実を外したまま日本人が台湾を語ることはできない。

植民地支配による近代化を担うという役割のなかで、山口県人は台湾に入った。萩出身の賀田金三郎は台湾併合の際の運輸担当業者として台湾とかわり、最後は東台湾に植民村を建設した（原住民族の襲撃を受けて最終的には挫折）。清が建設を始めた台湾西海岸の鉄道建設をさらに拡張して、南北縦貫鉄道を完成させたのは小野田出身の長谷川謹介だった。総督として台湾を統治し、原住民族との武力闘争をも含む「理蕃事業」を行ったのは佐久間左馬太である。台湾で諸活動を行った日本人はもちろん山口県出身者に限らないが、このようなかなり苛酷なものを含めた「投資や植民の基盤整備」が行われてから、台湾には日本人が行きはじめたのである。台湾で「古蹟」として保存され再活用されている日本時代に建設された大小の建築物などは、その上にあるものだと考えていかなければならない。

上記のような日本の植民地政策が作った基盤の上で、台湾住民の間にも教育が普及するようになり、日本

図2 台北芝山巖の「学務官僚遭難之碑」



語を通じて教育を受けた台湾の住民の中から日本を経由して手に入れたものを通して自らの考えや存在自体を主張しようという動きが現れた。日本語による台湾文学の創作を始めた台湾人文学者や、台湾美術展覧会を通じて自らの作品を出品し始めた台湾人芸術家たちである。またこのような流れの中で、「自治植民地化」という形で自らの統治を手に入れる運動としての「台湾議会設置運動」も行われた<sup>(3)</sup>。近代台湾の文化などを考える際には、このように複雑な背景が概略として理解されている必要がある。

上記のような流れの中に、山口県立大学が台湾との交流を考えるきっかけとなった台湾近代の画家陳澄波と上山満之進との関係もある。このあたりについては、以前にも書いたことがある<sup>(4)</sup>が、読者の便宜上少しだけ説明しておきたい。

防府出身の官僚・政治家上山満之進は、戦前期政党政治の時代、若槻礼次郎の内閣で台湾総督に任じられた。任官直後に金融恐慌処理で政権交代（民政党の若槻内閣→政友会の田中義一内閣）が起こったため、民政党内閣時代に任じられた上山の任期はかなり短いものとなってしまった（最終的に、台湾を訪問した皇族への襲撃未遂事件に対する引責辞任という形をとって辞職に追い込まれた）。

その後総督退任に際して受けた慰労金で、上山は創設間もない台北帝国大学に文化人類学研究のための寄付を行った。寄付のほか

に、上山は陳澄波に台湾の風景画を依頼したのである。陳澄波はこの求めに応じて1930年、油彩画『東台湾臨海道路』を描いた。この絵は上山邸に飾られた後、上山の遺産で作られた防府市立三哲文庫（防府図書館の前身）に渡された。その後長い間、画家を襲った運命（2・28事件で政治犯として殺害された）を知ることなく、絵は防府図書館の閲覧室に飾られていた。何度か図書館は移転し、現在地において絵は飾られていなかったのだが、上山満之進の伝記執筆を依頼されていた防府市在住の僧侶・龍谷大学名誉教授児玉識氏がこの絵の存在を再発見した。児玉氏と親交があったのが本学の安溪遊地教授であった。安溪教授は既にこの時点で、台湾大学での地域実習（日本時代文書の整理補助作業）を行っていた。安溪教授は陳澄波の子孫が運営する陳澄波文化基金会との連絡を取った。これが、台湾地域実習に「嘉義」（陳澄波の故郷）が加わるきっかけとなった<sup>(5)</sup>。かくて、山口と台湾を結ぶ関係というテーマのもと、首都の台北だけでなく地方都市まで含めた、地域や文化により深く入りこむ地域実習を行うことになっていった。

## 二 国立中正大學文學院とのMOU締結

嘉義で本学側を受け入れてくれたのは、陳澄波文化基金会、そして今回協定締結に至った国立中正大學であった。国立中正大學との最初の実習では、同大学の学生とともに阿里山を訪問した（阿里山は上山が総督就任後時間をかけて訪問しており、陳澄波も阿里山のスケッチや作品を多く残している）。

国立中正大學は台湾南部の嘉義県にある。嘉義と言えば、映画『KANO』で日本でも知られるようになった街、嘉義市がある。日本の植民地時代には「台南州」に属していた。嘉義市を取り囲むようにして、嘉義県は存在している。中正大學はこの嘉義県の北部といえる場所に位置している。台湾の場合、大学成立の背景はさまざまである。日本時代に創立された学校が母体になっているもの（国立台湾大学や成功大学、中興大学、台湾師範大学）、中国にあったものが中華民国政府の台湾移転とともに移ってきたもの（清華大学、中山大学、私立の輔仁大学）、そして台湾で創立された大学である。中正大學は最後のものにあたり、2019年で創立から30年という歴史の若い大学である。交流当初から、国立中正大學の側は本学との提携関係を望む発言をされていたことは明記しておきたい。特に熱心に山口県立大学との関係締結を望んでいたのは、「台湾文学與創意応用研究所」（研究所は大学院にあたる組織）であった。同研究所は、元来は文学研究を行う大学院であったが、文学や芸術などを郷土の文化遺産として地域づくりに活用するという社会的な活動を熱心に展開していた<sup>(6)</sup>。嘉義市は既に陳澄波を郷土の生んだ画家として顕彰し、嘉義市の市街地各所には陳澄波の作品複製が飾られている。絵の対象になった場所に飾ることによって、芸術作品と地域との直接的なつながりを感じてもらえるようにする取り組みである。このような活動をしている中正大學は、山口県立大学の掲げている地域貢献大学という目標と重なるものを持っているといえることができる。

図4 中正大學と地域との連携活動で作られた刊行物(絵本と絵葉書)



本学からは中正大學に対して、地域実習での訪問や、日本語教育実習・日本語TAでの派遣などが可能かどうかを提案していた。2019年度、曲折がありながらも実施できた地域実習<sup>(7)</sup>において、筆者を含む一行は

図3 2016年訪問の際、中正大學「台湾文学與創意応用研究所」の活動について説明を聴く



前提としては大いに今後の関係に期待が持てる場所であったが、本学の側で提案を受ける部局がどこになるかが容易に定まらなかった。国際文化学部がこの提案を受けることが考えられたが、中正大學の台湾文学與創意応用研究所は大学院にあたるため、協定締結の相手にはなることができなかった。大学院での検討もなされたが、この時期別の国の大学とのMOU締結問題があり、同時並行的に動くことが困難とすることで実行されなかった。かように、本学側でMOUの締結を推進できる場所がどこなのかが見つからないう状態が続いていた。2019年になり、国際文化学部から逆にMOUが締結できる部局はないかという提案がなされることになり、中正大學の文学部とのMOU締結の提案がなされた。この間既に3年ほどの時間が経過しており、正直なところ筆者はこの提案に中正大學側が返答をするかどうかも含めてかなり懐疑的であったことをここに記しておきたい。長期間にわたり提案が停滞したため、既に提案としては効力が失われていると考えていたのである。しかし、中正大學側は本学の「まずは学部間のMOUから締結」という提案を受け入れて下さることになった。

中正大學を訪問した。学生が大学キャンパスと図書館などを案内されている間、筆者は中正大學文學院の陳國榮院長と会見し、日本語教育関係のことをお願いした。中正大學はこの提案に快く応ずる旨返答をされた。この後、中正大學からは本学との学生の交換留学を提案された。これについては持ち帰って検討することを返答した。結果として交換留学などは最初の段階での学生・教員交流や共同研究が軌道に乗った後で実現していくことに努力するという事になった（交換留学は費用負担の問題が発生するからである）。帰国したのち、中正大學と本学部との間で、MOUの案文作成と相互での意見調整を行った。案文の主要な内容としては、山口県立大学国際文化学部と中正大學文學院との間で協定を締結すること、今後の関係として相互に学生や教員の往来をしていくこと、ただし双方に費用が発生することはないこと、必要があれば今後また調整していくことである。

MOUの本文は英語のみとした。日中両国語の片方だけでも入ると非対称な関係になってしまう。また両国語だけで作成すると、双方の言葉の微妙な差が生じた際に困難な事態が発生する懸念がある。第三の言語となる英語だけでMOUが作成されたのはこのような理由による。最後は発効の日付や更新に関する規定を入れて、双方でMOUの案文が整った<sup>(8)</sup>。

2019年10月31日に、本学国際文化学部の水谷由美子学部長と筆者が中正大學文學院を訪問した。MOUの調印式に出席するためである。中正大學でこの締結に立ちあったのは、陳文学院院长、許華孚国際事務処国際長、江寶釵中国文学系主任（前・台湾文学與創意応用研究所所長）、および楊智景台湾文学與創意応用研究所所長であった。双方が文書に署名し、記念品贈呈と記念写真を撮影した。これに先立ち、双方の大学紹介や今後の交流で出来得ることについての意見交換が行われた。中正大學側は、今回の調印式において出席した人々が来年の5月をめどに山口県立大学を訪問したいという希望を述べた。これは実現することになるだろう。

このような中で、やはり日台間の学期の区切りが異なることが、今後の交流で一つの問題となることも分かってきた。台湾は9月入学の制度になっているため、山口側が動きうる夏季休業期間は、日本でいえば春休みにあたる。そのため入学試験や新学期の準備等で忙しい時期に当たるため、大学訪問としては適切ではない。このような問題も処理していかなければならない。

## 小括

以上のように、本学国際文化学部と中正大學文學院の間にはMOUが締結された。しかしながら、取り決めは締結されたら終わりではなく、今後はここで決めたことを実行しなければならない。相互の学生や教員の往来が実際になされていく必要がある。これまでは地域実習だけであったが、これからは単に一科目の問題だけではなく、実際に学部として実行されていく必要がある。

またこのためには、大学において台湾についてより知っておく必要もある。歴史や現在について、多くの情報は出ているが、今のところ関心のあるものが自主的に集めてきたというのが現実のところである。これが、より教育現場において学生へと伝えられる必要がある。学生が台湾に出かけるだけでなく、台湾から教職員・学生が来校して、本学学生と接触していくことになるからである。

※本報告は、平成31年度山口県立大学研究創作助成（教育改善）による成果の一部である。なお、本文中に

図5 陳澄波の作品複製が掲げられている嘉義市役所入り口



図6 MOU調印直後の記念撮影。左から、江寶釵中国文学系主任、許華孚国際事務処国際長、陳國榮文学院院长、水谷国際文化学部長、井竿、楊智景台湾文学與創意応用研究所長、2019年10月31日、中正大學にて(中正大學側の撮影)



ある、陳澄波『東台湾臨海道路』を再発見した功労者であった児玉識氏が、2019年10月13日に逝去されたことは、大変残念なことであった。御冥福をお祈り申し上げたい。

## 注

- (1) 拙稿「山口と台湾を結ぶ道を拓く」(吉永敦征との共著)『山口県立大学学術情報』12号(国際文化学部紀要25号)、2019年。
- (2) 栖來ひかり『台湾と山口をつなぐ旅』西日本出版社、2018年。栖來氏は2019年になって、『時をかける台湾Y字路』ハウレーカ、2019年を發表した。
- (3) 筆者も担当者の末席にいた、国際文化学科の専門科目「アジア社会論」(2年生以上の配当、担当は金恵媛教授と岩野雅子教授、そして筆者である)では、2019年度前期の講義で台湾近代芸術史の専門家である台湾大学の邱函妮氏にこのような背景を有することを含めて、陳澄波の絵画について語ってもらった。ただ、受け止める側の学生にこのようなことを一度も教えられた経験がないことを了解する結果に終わってしまった。そもそも、日本の高等学校の歴史教育では、台湾については植民地化された事実以外に知ることはほとんどない。一般書籍やネット情報で、児玉源太郎と後藤新平について知っていればよいほうである。
- (4) 前掲「山口と台湾を結ぶ道を拓く」。
- (5) 児玉氏のこの成果は、『増補版 上山満之進の思想と行動』海鳥社、2016年として公表された。また、上記の経緯については『上山満之進と陳澄波 山口県と台湾の友好をめざして』(安溪遊地・吉永敦征との共編著)山口県立大学ブックレット「新やまぐち学」7巻、2017年を参照のこと。
- (6) 今回の訪問で分かったのだが、中正大學は、「大学の社会的責任」という国家プロジェクトに採択された諸活動を行っている。図4の刊行物もこのプロジェクトの一環として出されている。
- (7) 今年度は2019年9月1日から9日までの日程で行った。
- (8) もちろんこのような案文作成が筆者単独の手でできたわけではない。これはウィルソン・エイミー教授を長とする本学高等教育センターグローバル部門の方々に、過去本学で締結されたMOUの文面をもとにしてたたき台を作成していただいた結果である。

